

ISBN 978-4-903875-23-1

Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series 20

ユーラシア諸言語の多様性と動態－20号記念号－

ユーラシア言語研究コンソーシアム 2018年3月発行

Diversity and Dynamics of Eurasian Languages: The 20th Commemorative Volume

The Consortium for the Studies of Eurasian Languages

『翻訳満語纂編』の満洲語語釈に対する日本語訳の原則
Some Principles of Translation from Manchu to Japanese
in *Honyaku Mango Sanhen*

松岡雄太

MATSUOKA, Yuta

『翻訳満語纂編』の満洲語語釈に対する日本語訳の原則

松岡 雄太

【キーワード】長崎唐通事 満洲語 『翻訳満語纂編』 語釈 日本語訳

1. はじめに

長崎唐通事は 19 世紀半ばに満洲語を学び、二種類の満洲語辞典を編纂する¹。現在、長崎歴史文化博物館に所蔵される『翻訳満語纂編』（5 巻 10 冊）と『翻訳清文鑑（清文鑑和解）』（4 巻 5 冊）（以下、『翻訳清文鑑』と称する）がそれである。これらは共に 18 世紀半ばに中国で編纂された『御製増訂清文鑑』（以下、『清文鑑』と称する）を底本に編まれたものである。

『翻訳満語纂編』、『翻訳清文鑑』ともその体裁は同じである。すなわち、まず見出し満洲語の語句に対してその右側にながで独自の「転写」をし、次にその下にその語句に対応する漢語訳、その下に満洲語による語釈が続き、最後にその語釈に日本語訳をふしてある。『翻訳満語纂編』の巻一から一例を挙げると、(1)の通りである。

(1) a・陽 ○ amba ten aššafi banjinahange be, a sembi.

太 極 動キ。 生シタルモノ ヲ。 陽ト 云フ。

[上 10a 鄭永寧]

見出し満洲語の語句とその漢語訳、および、満洲語の語釈の部分は底本の『清文鑑』のものをそのまま採用しているわけであるから、唐通事によるオリジナリティーは、満洲文字に対するかな表記と語釈に対する日本語訳の部分にある。本稿が対象とするのは、後者の満洲語の語釈に対する日本語訳である²。だが、一口に日本語訳といっても、その考察対象は多岐にわたる。

第一に、満洲語の語釈に対する日本語訳はそもそもどのようにしてふされたのか、という基本的な問いである。すなわち、満洲語を日本語に訳すにあたって原則はあったのか、訳編者はどれほど満洲語ができたのか、といった問題である。

第二に、訳編者個々人の満洲語能力に関する問題である。というのも、『翻訳

¹ 唐通事が満洲語を学ぶことになった背景やその過程などについては松岡(2013a)を参照。

² 見出し満洲語の満洲文字に対するかな表記についての考察は松岡(2013b)を参照。

満語纂編』と『翻訳清文鑑』の編纂に関わったのは一人ではなく、『翻訳満語編纂』の編纂に関わった者は総勢 22 名、『翻訳清文鑑』に関わった者は総勢 5 名である。つまり、訳編者ごとに考察することによって、訳編者間に満洲語能力の差があったかどうか分かる可能性がある。

また、『翻訳満語編纂』が『清文鑑』全体の中から 2632 語句を抜き出し³、巻ごとに語句を十二字頭順に配列しなおしたものであるのに対し、『翻訳清文鑑』は『清文鑑』の巻一から巻四をほぼそのまま使用したものである。よって、『翻訳満語纂編』が収録する語句のうち、『清文鑑』の巻一から巻四から抜き出したものは、自ずと『翻訳清文鑑』の収録語句と重複することになる。つまり、同一語句を別の訳編者が担当した場合、それらを比較することによっても訳編者間に満洲語能力の差があったかどうか分かる可能性がある。

第三に、唐通事たちの満洲語能力の変遷に関する問題である。『翻訳満語纂編』と『翻訳清文鑑』は全巻同時に完成したものではない。1851（嘉永 4）年から 1855（安政 2）年にかけて毎年『翻訳満語纂編』は一巻上下二冊、『翻訳清文鑑』は一冊ずつ編纂され、年ごとに長崎奉行所に上梓されている⁴。つまり、同一訳編者が複数年（複数巻）に亘って編纂に参加した場合、巻ごとに分析することによって、各訳編者の満洲語能力が年を追うごとに変化していったかどうか分かる可能性がある。

このように、満洲語の語釈に対する日本語訳の考察はその対象が多岐にわたる。本稿ではひとまず『翻訳満語纂編』巻一のみを対象とし、第一の問題、すなわち、1851 年の初年度に『翻訳満語纂編』の編纂に関わった訳編者らがどのような日本語訳をしたのかに限定して、つまり、最初に満洲語を学んだ者たちの編纂に焦点を絞って論じることとする。『翻訳満語纂編』巻一の編纂に関わった者は以下の 14 名である。

(2) 巻一の訳編者

	字頭	語数	訳編者
上 巻	a, e, i, o, u, ū	20	鄭永寧
	na, ne, ni, no, nu, ka	30	高尾延之
	ga, ha, ko, go, ho, kū	20	神代定光
	gū, hū, ba, be, bi, bo	25	彭城廣林
	bu, pa, pe, pi, po, pu, sa, se	30	石寄親之
	si, so, su, ša, še, šo, šu	33	游龍俊之
	ta, da, te, de, to, do	40	彭城種美

³ 『翻訳満語纂編』における語彙選抜の基準については松岡(2013c)を参照。

⁴ 『翻訳満語纂編』に関しては各巻の序文に上梓年の記載があるほか、長崎歴史文化博物館所蔵の『両通詞諸州之語年々和解之儀ニ付書付』（文献番号：B)12 6-2）という文献にも同様に上梓年に関する記載がある。『翻訳清文鑑』の上梓年については松岡(2013a: 70-73)を参照のこと。

下 卷	tu, du, la, le, li, lo	40	穎川春重
	lu, ma, me, mi, mo, mu	30	穎川道香
	ca, ce, ci, co, cu, ja	18	穎川雅範
	je, ji, jo, ju, ya, ye	30	彭城雅美
	yo, yu, ke, ge, he, ki	40	鉅鹿篤義
	gi, hi, ku, gu, hu, fa	22	蘆塚恒徳
	fe, fi, fo, fu, wa, we	24	彭城昌宣

(2)は上原(1971:18)をそのまま引用したものであるが、上原の数字は一カ所だけ誤りがある。上巻の二人目にある高尾延之が訳出した語句数は30ではなく31である。原文中には訳编者ごとに各自が担当する最初の帳に氏名が記されており、その上に担当字頭と担当語句数も記載されているのであるが、高尾延之の上には確かに「na, ne, ni, no, nu, ka 六字頭三十言」と記されている。上原氏はこの数字をそのまま書き写したため、正確な数字を見誤ったのである。よって、巻一の収録語句数は都合403である。

また、(2)の表には現れていないが、実際に数えてみると、下巻の数字にも齟齬が見られる。穎川雅範が訳出した語句数は18とあり、鉅鹿篤義が訳出した語句数は40とあるが、実際に数えてみると、穎川雅範は14、鉅鹿篤義は44ある。だが、齟齬の理由は語積の部分を見ることによって明らかとなる。穎川雅範が訳出した箇所の下巻17帳裏にある「cecike tatara asu 拉雀網」の語積は(3)に示すように途中で切れている。

- (3) golmin juwan da funcembi, yasa ajigen, dulimba be bukdamé hadahan de
 長サ 十 ヒロニ 余リ。 目 ホソク。 ナカ ヲ クミテ カギ ニ
 hūwaitafi juwa ergi be gala arame dedubume sindafi, ajige sujahan sujafi dubede
 クリ。 両 方 ニ 手ヲ ツケテ フセ オキ。 小キ サへ木ニテ サへ。 サキニ
 golmin selei sirge hūwaitambi, cecige[sic.cecike]⁵ doha manggi, selei sirge be
 長キ ハリ カ子ヲ クリ。 小鳥 オリシ 時。 ハリ カ子 ヲ
 (ta)tame
 ヒキ。

一方、鉅鹿篤義が訳出した下巻26帳裏の「kemu -i tampin 漏壺」の語積には、帳をまたいで27帳表に意味の通じない文が続いている。

- (4) (前略) urgide[sic.dorgide] ilibume sindaha erin kemu i sibiya, muke i mutuha
 内ニ 立テ オキタル 時 刻 ノ 箭。 水 ノ 満ツル

⁵ 語積の満洲語部分には少なからず表記の誤りが見られるが、誤りのタイプは見出し語句の満洲語部分と共通するので本稿では言及しない。見出し満洲語の誤りについては松岡(2015)を参照。

be tuwame ulhiyen i wesihun tucime teisulehe erin kemu be jorimbi.
 ニ ツイテ 次第 ニ 上ニ 出テ ムキアイタル 時 刻 ヲ 指ス也。
asu be kamcibume butarangge be, cecike tatara asu sembi.
網 ヲ ヨセテ カクルモノ ヲ。 拉 雀 網 ト云。

(4)の下線部はちょうど帳をまたいで 27 帳表にあるのだが、実は(3)の続きである。なお、27 帳の表と裏に収録された残りの語句は、「cecike fungiyeku⁶ 吹筒」「cejeleku 領衣」「cinuhūn -i araha bukdarun 硃卷」「cirumbi 枕」の四語句であるが、「ce」または「ci」で始まっていることから鑑みても、これは鉅鹿篤義が訳出したものではなく、潁川雅範が訳出したものと考えられる。つまり、下巻の 27 帳は本来 18 帳目に挿入されるべきものが、綴じる際に誤って鉅鹿篤義のところに分れこんでしまったと結論づけられる。だが、本文中の潁川雅範と鉅鹿篤義の上に記された「十八言」や「四十言」とある数字は本来訳出した数であったから、上原は結果的に正しい数字を数えたことになる。

2. 日本語訳の原則

唐通事たちは満洲語の語釈をどのようにして日本語に訳出していたのか。冒頭の(1)や上記の(3)、(4)の一例を見ても分かるように、その大原則は「逐語訳」である。三章で後述するいくつかの例外を除き、訳編者は皆逐語訳に徹している。本章では唐通事たちが一つ一つの満洲語の語句の意味をどのようにして訳出したのかについてできうる限りの考察を加える。

2.1. 先行研究

『翻訳満語纂編』と『翻訳清文鑑』における語釈の日本語訳に言及した先行研究は、管見の限り上原(1971)のみである⁷。まず、上原(1971)も言及するように、語釈の日本語訳に関しては、『翻訳満語纂編』巻一の凡例に記述がある⁸。

(5) 凡例 (第三項)

満語句毎ニ漢字ノ訳アリ 加之清文ノ註詞ヲ啓発シ 翻訳ヲ加ヘ其理ヲ暢ヘテ 事物詳カナレハ 本文ニ和解ヲ加ヘス 清文恰モ国字□□□□⁹以テ 同文異義スル事アレハ 詞ハ層見疊出□□□□同カラス 総而虚字ノ言葉遣ヒ漢字ノ奥義ニ至ラス 漢字モ亦和語ノ簡ナルニ及ハサル事アリ 此ニ由テ漢字用サル事能ハスト雖トモ 専ラ漢字ニ依テ解セハ義深シテ却テ詞離ル事アラン歟 因テ訓詁ヲ異ニシテ偏ニ理會ノ速ナルヲ要トス

⁶ sic.fulgiyeku.

⁷ 赤峯(1989, 1990, 1991)は『翻訳満語纂編』における語釈の日本語訳部分のみを抜き出してテキスト化したものであるが、内容に対する具体的な考察は行っていない。

⁸ (5)と(7)は、旧字体の漢字を一部新字体に改め、適宜分かち書きを加えている。

⁹ □は原文が虫喰いなどの理由により判読できない箇所を表している。

(5)に対する上原の評価は以下の(6)の通りである。

- (6) 満・漢・和 3 文の一面の特徴は捕らえているが、その相互の関係を整理して体系的に説明するには至っていない。(上原 1971:15)

(7) 凡例 (第四項)

清文虚実ノ助字アリテ 能演ニ縁リ其意義ヲ表裏ニ転易ス 乃本朝ノ字訓ニ^{アツキ}ト云ヘル
 実字ヲ^{アホク}扇ト云ヘハ 虚ニ変ルノ類ヒ 清文ニ比較シテ毫釐モ違フ事ナシ 原ヨリ助語テ
 ニヨハ有テ備サニ文意ヲ述ト雖トモ 事情聯貫ノ宣ニ從ヒ 或其詞質ヲ失ハン事ヲ患ヒ
 テ 用ル所ノテニヨハ画一セサルヘシ 和語ニ^{ツキト}月日漢語ニハ日月ト云フ如キ 清文ニモ
 雄雌横縦ト^{アホク}類ヒ尤多シ 皆本朝ノ句調ニ仿フ 又形勢声響ニ属スル詞ハ 人ノ耳目ニ
 触レハ聊異国ト殊ル事アリ 能其意ニ協フモノハ和訓ヲ用レトモ 俚鄙ニ涉ルモノハ只
 字ノ傍ニ其形勢ノ意ヲ記ス (後略)

(7)に対する上原の評価は以下の(8)の通りである。

- (8) 日常単なる通訳者としての生活であっても、異なる 2 言語を解し得た訳編者達には、異なる言語間の文法的相違についても気付く面が多かったに違いない。その点では新しく解し^{アホク}初めた満洲語^{アホク}についても同様であろう。従ってここでもその文法面に触れている。しかしこの方面に対する学問的研究に従わなかった彼等には、不十分な点が多い。「清文啓蒙」、「清文虚字指南編」等の書すらも、目を通していなかったのではないかと思われる。(上原 1971:15-16)

上原が指摘するように、唐通事たちは『清文啓蒙』に目を通していなかったと思われる。『翻訳満語纂編』の巻一と巻四の序文を通じて、唐通事たちが辞書の編纂にあたって使用できたのは『清文鑑』一帙のみだったことを我々は知りうる¹⁰。唐通事らが目にできたのが『清文鑑』のみであったとしたら、それは唐通事の手元には『清文鑑』しか入らなかったからであって、高橋景保のように『清文啓蒙』を参照できた者と比較してその満洲語能力云々と批判するのはあまり意味をなさない。上原は以後この論文でいくつかの具体例を挙げながら、唐通事らの日本語訳の誤りを指摘して批判を重ねる。

上原(1971)が述べるように、確かに訳編者の誤訳と思われる箇所があるのも事実である。しかし結論から言えば、語釈の日本語訳全体を眺めた場合、必ずしも唐通事の満洲語能力は劣ってはいないことが分かる。すなわち、誤って意味を理解した箇所よりは、正しく理解してある箇所が圧倒的に多いのである。本

¹⁰ 松岡(2013a: 68)を参照。

稿では以下、唐通事がどのようにして満洲語の語釈を日本語に訳出していったのかという原則について多角的に論じたい。結論から言えば、満洲語の語釈に対する日本語訳の原則は、上の(5)と(7)の凡例に示されている。以下、(5)と(7)の凡例が意味するところを用例とともに見ていく。

2.2. 文法の理解

唐通事たちは満洲語文法をどれほど理解していたのだろうか。上の(3)と(4)の中にも文法形式は出てくるが、改めて一例を挙げると以下の通りである。

- (9) kemu i tampin **i** **ujude** **bisirengge** **be**, inenggi abkai tampin sembi, teišun **i**
 漏 壺 ノ 第一三 **有モノ** ヲ。 日 天 壺ト 云フ。 真鑰 **ニテ**
arahangge durun hiyasei **adali**, den ici emu jušuru nadan jurhun, dergi mutun
 作リ**タル者**也。 形ハ 斗ノ **如ク**。 高 サ 一 尺 七 寸。 上 濶
 emu jušuru uyun jurhun, julergi fere **de** nikeneme muke sabdara gu **i** sihan
 一 尺 九 寸。 前ノ 底 **ニ** ヨセテ 水ノ 滴ル 玉 ノ 管ヲ
 sindame **arahabi**, erei dorgi muke dobori abkai tampin **de** sabdambi.
 ツケ 作レリ。 此 内ノ 水。 夜 天 壺 **ニ** オツルナリ。
 [inenggi abkai tampin 日天壺: 上 11b 鄭永寧]
- (10) enggemu **de** etubohē[sic.etubuhe], sukū **i** weilehengge **ocibe**, cengme suje boso
 鞍 **ニ** キセタルナリ。 皮 **ニテ** 作リタルモ□ **ニテモ**。 倭緞。 絹 布
 i jergi hacin **i** weilehengge **ocibe** gemu soforo **sembi**.
 等ノ 類 **ニテ** 作リタルモノ **ニテモ**。 皆 鞍座子 ト云フ。 [soforo 鞍座子: 上 37b 游龍俊之]
- (11) menggun teišun toholon i jergi jaka **be** cikin jerin tucibume muheliyen **obume**
 銀 真鑰 錫 等ノ 物 ヲ。 フチ キワ タテ、 丸ク ナルヤウニ
 tūfi muke tebufi dere oborongge **be**, obokū **sembi**.
 打立。 水ヲ イレ 顔ヲ 洗フモノ ヲ 洗臉盆ト 云フ。 [obokū 洗臉盆: 上 12b 鄭永寧]
- (12) boco suwayan, asha dethe **de** yacin boco bi, amila emile sasa deyembi,
 色 黄 羽翎 翅翎 **ニ** 青 色 有リ。 雄 雌 齊 飛フ。
 juwe biya **ci** bolori wajitala guwembi.
 二 月 ヲ 秋 オワルマデ 鳴ク。 [gūlin cecike 黃鸝: 上 24b 彭城廣林]

(9)~(12)が『翻訳満語纂編』に確認される全ての文法形式ではもちろんないが、ここから唐通事らが助詞や語尾などについて、概ねきちんと理解していたことが窺えよう。ただどのように翻訳するかは若干個人差もある。例えば上の例において「-ha/-he/-ho」は「タル/タルナリ」のように訳されているが、「シ」と訳している者もいるといった具合である¹¹。

文法に関しては迂言的な形や後置詞のようなものであっても、きちんと理解

¹¹ 文末の「-ha/-he/-ho」と「-habi/-hebi/-hobi」の区別は特段見られない。同様に、(9)と(11)の例からも分かるように、「-me」と「-fi」の区別はしておらず、さらに「-hai/-hei/-hoi」とも区別していない。このように日本語で区別しにくい文法形式について特段日本語訳でそれらを区別しようとした痕跡はない。

できている。一例を挙げると、以下の通りである。まず、(13)は「-ci ombi」に関する例である。

- (13a) hengke i gebu, boco niowanggiyan, golmin muwa adali akū, eshun jeci ombi.
瓜 ノ 名。 色 ^{ミソ} 緑也。 長キモノ 横大キモノ同シ カラズ。 生モ 陰 ラレ。
urebufi jeci inu ombi.
煮熟シ 陰 モ ヨシ。 [nasan hengke 王瓜: 上 15b 高尾延之]
- (13b) boco fulgiyan, tokto[sic.okto] acabure de baitalambi da(l)aganahangge be coman i
色 □□ 葉 調合スル ニ 用ユ。 カタマリタルモノ ヲ以。 盃
jergi boyarame[sic.buyarame] tetun araci ombi.
ナトヲ 細 器ニ 作ラレルナリ。 [wehe cinuhūn 硃砂: 下 41b 彭城昌宣]
- (13c) mergesei banjibuha araha bithe, jalan de ulaci ojoro baita hacin be ejeme
賢人ノ 編ミ 作リシ 書ナリ。 世 ニ 傳ユベキ 事 ドモ ヲ 記ルシ
araha bithe be, ulabun sembi
作リタル 書 ヲ。 傳ト ユフ。 [ulabun 傳: 上 13b 鄭永寧]
- (13d) muke boihon harhū šumin yabuci ojorakū ba be (li)fakū sembi.
水 地 泥寧 深シテ。 行 レヌ 處 ヲ。 陷泥 ト云。
[lifakū 陷泥: 下 6b 潁川春重]

上原(1971:20)は(13a)の例をとり、「-ci ombi」を「可能」のように翻訳するのは誤りであると述べているが、そうではなからう¹²。

用例は割愛するが、同様に可能・不可能表現である「-me mutembi」は「～ヲヲ能スル¹³」や「～シ得タル¹⁴」のように、「-me bahanarakū」は「～ヲヲ得ズ¹⁵」や「～シカタキ¹⁶」のようにきちんと理解できており、義務表現である「-ci acambi」も「～スベキ¹⁷」ときちんと理解できている。

次に、(14)は「連体形語尾+de」の用例であるが、「トキ」と訳出している者がある。『清文啓蒙』巻三の「清文助語虚字」には「ohode」の意味が「了的時候字」とあるが、このような知識を唐通事らはどうやって身につけたのだろうか？

- (14a) bele jeku be, aika jaka de tebure de, baitalara tetun i gebu, (後略)
米 穀 ヲ。 ナニソノ 器 ニ 入ル、トキ。 用ユル 器 ノ 名。
[belel sihabukū 米漏子: 上 26a 彭城廣林]

¹² (13)に挙げたように「-ci ombi」を可能表現や義務表現のように訳出するものがある一方で、「～テヨシ」のように訳出するものもあり、個人差が見られる。「sohon moo 黄楊木」(上 37a: 游龍俊之)、「tahūra 蛤蜊」(上 44a: 彭城種美)などの項目なども参照のこと。

¹³ 「horonggo cecike 金吾」(上 23b: 神代定光)

¹⁴ 「hiyoošungga jui 孝子」(下 34a: 蘆塚恒徳)

¹⁵ 「temege coko 駝鴉」(上 46a: 彭城種美)

¹⁶ 「derakū 没體面」(上 48a: 彭城種美)

¹⁷ 「guribume fungnembi 貳封」(下 36a: 蘆塚恒徳)

(14b) (前略) muke labdu ohode sangga deri muke dendere tampin de eyebufi, (後略)
 水 多ク ナリシ時 穴 ヨリ 分 水 壺 ニ 流。

[muke be necin obure tampin 平水壺: 下 15a 潁川道香]

(15)は後置詞の一例であるが、やはり『清文啓蒙』巻三の「清文助語虚字」にも出てくる「ofi」、「manggi」をそれぞれきちんと訳出している。ただ「manggi」を「トキ」と訳出するのが適切かどうかの是非は稿を改めて論じたい。

(15a) nadan biyai ice nadan be, nadangga inenggi sembi, ere yamji hehesi, sargan
 七 月 初 七日 ヲ。 七 夕 ト云。 此 晚。 婦人。 女ノ
 juse biyai fejile ulme de tonggo semime faksi ojoro be jalbarime baime ofi,
 子。 月 下ニテ 鍼 ニ 線ヲ 穿シ 巧 ナルヲ。 禱 求 ヨリ。
 tuttu hacin inenggi obohabi[sic.obuhabi].

故ニ 節 令ト ナシタリ。

[nadangga inenggi 七夕: 上 15a 高尾延之]

(15b) (前略) geli sunja tanggū aniya oho manggi šanyan ombi, geli sunja tanggū
 又 五 百 年ニ ナリシ トキ。 白ニ ナル。 又 五 百
 aniya oho manggi yacin ombi.

年ニ ナリシ トキ。 青ニ ナル。

[buhū 鹿: 上 29a 石寄親之]

最後に、(16)は補助動詞の例であるが、『清文啓蒙』にも記述のないこのような形式にも一定の理解があったことは、唐通事の満洲語能力において評価すべき点であると筆者は考える。

(16) jeku gemu suiheneme waijifi, emu ici jalu anduhange[sic.manduhange] be,
 穀 皆 穂ニ 出ソロイ。 一 面ニ 満チ ノビワタルモノ ヲ
 suihe teksilehe sembi.

穂子秀齊 ト云。

[jeku teksilehe 穂子秀齊: 下 20a 彭城雅美]

唐通事たちが自白するように『翻訳満語纂編』を編纂するにあたって参照できたのが『清文鑑』だけだったというのが事実ならば、『清文鑑』から分かるのは語句の意味のみであるから、上記のような文法知識を得るのは困難だったはずである。しかし、文法形式に関してまるで『清文啓蒙』を参照したかのように見えるほど理解できているというこの事実は、あるいは唐通事らの周辺に満洲語を解する教師的な立場の人物（例えば、清人など）がいた可能性を示唆するものである。

2.3. 語句の理解

(17) largin facuhūn be giyan fiyan i dasame mutere be, ijimbi wekjimbi
 繁 乱 ヲ 條 理 ニ 治メ 得ル ヲ。 經 綸ト

sembi, (後略)

云フ。

[ijimbi wekjimbi 経綸: 上 12a 鄭永寧]

上原(1971:19)は(17)の例をして唐通事たちが満洲語の品詞を理解できていないと指摘する。すなわち、「ijimbi wekjimbi」を「経綸」と訳すと名詞になるから「経綸する」と訳すべきという指摘である。しかしこの指摘は恐らく的を得たものではない。唐通事らは見出し語句を説明した語積のうち、「…(-ngge) be ○ ○ sembi(…(するもの)を○○という)」となっている「○○」に該当する部分は見出し語句にふされた漢語訳のままにしているからである。これは次の(18)の例からも瞭然である。

(18a) jancuhūnje cikten ci murime gaiha šugi be fuifuha dabsun i gese šanyan

甘蔗ノ 莖 ヨリ シボリ 取タル 汁 ヲ 子リテ。 塩 ノ 如ク 白キ

ningge be, šatan sembi.

モノ ヲ。 白糖 ト云フ。

[šatan 白糖: 上 40a 游龍俊之]

(18b) je bele be ufafi, šatan ucufi fuyere muke i hungkerefi ukiyerengge be,

小 米 ヲ 粉ニヒキ 白砂糖ニアワセ。 滾 湯 ヲ サシテ スル□□ ヲ

šatan ufa cai sembi.

茶湯ト 云フ。

[šatan ufa cai 茶湯: 上 40a 游龍俊之]

(18a)と(18b)は同じ帳で横並びになっている。このことから意図的に「šatan」の項目の語積では漢語訳の「白糖」のままにしていることが分かる。

管見の限り、見出し満洲語の語句が語積中で別の訳文に言い換えられている例は、巻一に関して言えば、次の(19)のみである。ただしこの(19)も見出し語は「lifa」であるのに、語積の部分は「lifa taha」になっている点が、漢語訳のままにしなかった理由になっているとも考えられる。

(19) gab(tah)a agūra i šumin daha, yaya jeyengge jaka i fondo tokoho be,

射カケシ 物具 ノ 深ク 中タルナリ。凡 刃アル 物 ニテ 穿 扎タル ヲ。

lifa taha sembi.

深ク 中ル ト云。

[lifa 深中: 下 7a 颯川春重]

2. 3. 1. 漢語(訳)をもとに訳文を作る

唐通事たちが語積を日本語に翻訳する際、逐語訳を原則にしたことは既に述べたが、逐語訳と一口に言っても、その訳し方は様々である。まず注目すべきは(20)のような例である。

(20a) sunja jilgan jakūn mudan i uheri gebu.

五 聲 八 音 ノ 總 名

[kumun 樂: 下 35a 蘆塚恒徳]

(20b) dergi wargi julergi amargi geren gurun hafumbukū kamcifi hengkilenjime

東 西 南 北 諸 国ノ 通事 附添 朝觀シテ

wesimbure bithe be, tulergi gurun i bithe sembi.

奏スル 書 フ。 外 國 ノ 書 ト云。

[tulergi gurun -i bithe 外国書: 下 1a 頼川春重]

上の(5)で紹介した序文の「満語句毎ニ漢字ノ訳アリ 加之清文ノ註詞ヲ啓發シ 翻訳ヲ加ヘ其理ヲ暢ヘテ 事物詳カナレハ 本文ニ和解ヲ加ヘス」という部分は(20)のような例文のことを指し示していると考えられる。だが、(20)のような例は全体の中では少数で、大部分が(21)~(23)のような例である。

(21) akūha amala dergi yabuha ele baita be faidame arafi, amcame nasame
シニタル ^{アムニテ}後 其 ^{イシテ}行 アル 事 フ。 ^{ツラテ}列 ^{カキ}寫 ^{ヲモイデテ}追 ^{ナガキ}敷

araha bithe be, nasara bithe sembi.

作タル 書 フ。 誄 ト云。

[nasara bithe 誄: 上 16a 高尾延之]

(22) baita de kiceme hūdu wacihiyara be hahiba sembi

事 ニ ^{ハグミチ}龜。 ^{ハヤク}快 ^{トリシマウ}結 フ 急爽 ト云。

[hahiba 急爽: 上 21b 神代定光]

(23) uheri gebu, funiyeche yacin, angga šulihun bethei fatan (niyalmai) fatan i adali.
總 名。 毛色 ^{ウツ}青。 口 ^{トコノ}尖。 脚ノ ^{ウツ}底 人ノ 脚底 ニ 同ジ。

[lefu 熊: 下 5b 頼川春重]

(21)~(23)の例は、漢字にルビが振ってある。このような用例は非常に多い。この場合、漢字の部分は『清文鑑』の漢語訳がそのまま採用されているものがほとんどであり、恐らくその漢語に該当する適当な日本語をルビとして振ったものと考えられる。上の(5)に示した凡例のうち「総而虚字ノ言葉遣ヒ漢字ノ奥義ニ至ラス 漢字モ亦和語ノ簡ナルニ及ハサル事アリ 此ニ由テ漢字用サル事能ハスト雖トモ 専ラ漢字ニ依テ解セハ 義深シテ却テ詞離ル事アラン歟 因テ訓詁ヲ異ニシテ偏ニ理会ノ速ナルヲ要トス」という箇所はこのような用例を指し示していると考えられる。

ルビに着目した際、漢語にない区別をしようとした者や、漢語にない敬語を加えた者もある。

(24) yaya weilehe joboho niyalma de ulin hūda bure be, basa bumbi sembi.

凡 ^{シコトシ}作工。 辛勞シタル 人 ニ。 品物。賃錢ヲ。 ^{ツカフス}給 フ。 工錢ヲ ^{ヤル}給 ト云。

[basa 工錢: 上 26a 彭城廣林]

(25) f(u)sihun erdemu i arbun dursun be tukiyeceme maktame, mutehe gungge be,

高 德 ノ 象 體 フ ^{アゲ}頌 ^{ホガテ}讚。 勲 功 □

enduri genggiyen de uculere kumun i gisun be, tukiyecun sembi.

神 明 ニ ^{ウツニ}唱 樂 ノ 詞 フ。 頌ト 云。

[tukiyecun 頌: 下 1b 頼川春重]

ここまで見てきたように日本語訳の大部分は『清文鑑』の漢語訳をそのまま使用し、それにルビをふしているということだが、次に興味深いのは、(26)、(27)のような用例である。

- (26) booi an i baitalara dasihyakū, eriku, fiyoo polori, damjan, ultefun[sic. uldefun],
 家モトニテ 常ニ 用ユル。 揮子。 ■箒¹⁸。 箒箕。 大波籬。 扇擔。 木杵。
feshen, oton, derhi, futa i jergi jaka asarara ba be tetun jaka i calu sembi.
 籠¹⁹。 整木槽盆。 蘆席。 繩子 等ノ 物ヲ 貯ユオロ 所 ヲ。 傢伙倉ト 云。
 [tetun jaka -i calu 傢伙倉: 上 45b 彭城種美]

(26)において下線を引いた「eriku」、「fiyoo」といった語は『翻訳満語纂編』の見出し語句にも選ばれていない。なぜこのような語句の意味（漢語訳）を唐通事らは知っていたのだろうか。これらの用例から推測されることは、唐通事らは満洲語を学ぶ際、まずは『清文鑑』に掲載されている語句の意味を、漢語訳を通じて全的に理解していたのではないかということである。換言すると、唐通事らは『翻訳満語纂編』と『翻訳清文鑑』の編纂に先立って『清文鑑』の漢語訳を通じて満洲語の語句の意味を一つ一つ覚えていたのではないか、ということである。

(26)はルビが振られてある例だが、ルビが振られていない語で、『清文鑑』の漢語訳をそのまま利用し、かつ『翻訳満語纂編』の見出し語句にも選ばれていないものもある。

- (27) simikte i dorgi elten[sic. elden] bargiyashūn akū, ehe ningge be, lomikte sembi.
 猫晴 ノ 内ニテ。 光ノ サエ ザル 惡 者 ヲ。 ■子²⁰ ト云。
 [lomikte ■子: 下 8a 穎川春重]

さらにこのような傾向は熟語にも確認される。(28)～(30)のいずれも『翻訳満語纂編』の見出し語句に選ばれていない。

- (28) sele be amba šoge ci ambakan dulimba be narhūn (後略)
 鐵 ヲ 元 宝 ヲ 稍大ク。 中程 ヲ 細ク。 [selei holbokū 鐵錠: 上 34b 石寄親之]
 (29) bithei yamun i tinggin i baita be dara hafan be, taciha hafan (sembi)
 翰林 院 ノ 役所 ノ 事 ヲ 主ル 官 ヲ。 博 士ト 云。
wecen i baita be aliha vamun de inu ere hafan bi.
 太 常 寺 ニ 亦 此 官 アリ。
 [taciha hafan 博士: 上 43a 彭城種美]
 (30) meni meni an kooli de gocimbuha be, tacin sembi.
 其向々ノ 風 俗 ニ 仕付タル ヲ。 習俗ト 云。 [tacin 習俗: 上 43b 彭城種美]

¹⁸ ■は「たけかんむり」に「召」。

¹⁹ ■は「しかばね」に「世」。

²⁰ ■は「いしへん」に「果」。

(28)~(30)の「amba šoge」、「wecen i baita be aliha yamun」、「an kooli」はそれぞれ『清文鑑』の見出し語句にあり、その漢語訳がそれぞれ「元宝」、「太常寺」、「風俗」となっている。このことから、唐通事らが『清文鑑』の漢語訳を通じて満洲語を学んでいた蓋然性は高まる。

ここまで唐通事たちは訳文を作る際、『清文鑑』の漢語訳に基づいていたのではないかという点を指摘したが、中には次のような用例も見られる。

- (31) baturu horonggo gebu algin abkai fejergi de alkikangge[sic.algihangge] be
 勇 威ノ 名 声。 天 下 ニ キコエタルモノ 有_{有名} 名_的 ヲ。
 horon sembi
 威 ト云。 [horon 威: 上 22b 神代定光]

(31)の「algihangge」自体は『清文鑑』の見出し語句になっていないが、「algimbi」はあり、漢語訳は「宣揚」となっている。また「algingga」という語句も『清文鑑』の見出し語句にあるがその漢語訳は「有聲」である。いずれにせよ「有名_的」ではない。この日本語訳は恐らく、「algimbi」を漢語の「有名」と理解し、次に「-ngge」を漢語の「_的」と理解し、両者を組み合わせただろうと考える。つまり、これは漢語を解していた唐通事ならでは日本語訳だと言える。ここから示唆されるのは、唐通事らは満洲語を解する際に、『清文鑑』の漢語訳のみならず、当時の漢語（中国語）でも理解しようとしていたのではないか、ということである。ここから推測されるのは、日本語を解さない満洲語に堪能な清人の存在である。また、次のような用例もある。

- (32) yadara joboro ginggun olhoba niyalma be gosime kendumbihede[sic.hendumbihede],
^{カタワニテナンギシ} 残疾艱難。 敬ヒ 慎_フ心アル 人 ヲ 憐_ア愛ト 云ヘルニ。
 jilakan sembi, (後略)
 可憐 ト云。 [jilakan 可憐: 下 21a 彭城雅美]

(32)の「yadara joboro」の訳は「残疾艱難」と文になっており、「カタワニテナンギシ」とルビがふされている。これはこの語句を漢文で理解していたことを意味し、ルビはそれを日本語に訳したものと言える。

- (33) šuseme wasika alin i mudun bethe be hetu duleme yabure be,
 ハエ サガリタル 山 ノ スソ モト ヲ 横ニ 過キ 行ク ヲ。
heheri faitame yabumbi sembi.
横過山腿梁 行クト 云フ。 [heheri faitame 横過山腿梁: 下 31a 鉅鹿篤義]

(33)の「heheri faitame」はこの見出し語句の部分であり、その訳語は『清文鑑』の漢語訳のまま「横過山腿梁」になっているが、実はこの部分には「横_ニ過_テ

山腿梁-」というふうに返り点がふさされている。これはこの語句を訳出した鉅鹿篤義がこの語句の意味を書き下して理解していたことを示唆している。なお、(33)のような例は巻一に関して言えばこの一例のみである。

2.3.2. できれば自然な日本語に

このように唐通事らは、まず漢語（訳）をもとに訳文を作っていたと考えられるが、次に日本語にできるものは日本語で訳文を作ったものとする。例えば、次の(34)と(35)はそのことを端的に示している。

(34) **boo** (us)in i jergi jaka be niyalma de taka bufi, **boo**i giyalan u(si)n i imari
 家 田地 等ノ 物 ヲ。 人 ニ 且 給 屋ノ 間口 田 ノ 畝
 be bodome gaire hūda be, turigen sembi, (後略)
 ヲ。 筭テ 取ル 價値 ヲ。 祖子ト 云。 [turigen 祖子: 下 1a 穎川春重]

(35a) **bujuha** buda be herefi funchehe muke be botai[sic.budai] muke sambi[sic.sembi].
 煮タル 飯 ヲ 撈。 餘剩 水 ヲ 米 湯 ト云フ。
 [budai muke 米湯: 上 30a 石寄親之]

(35b) **yaya** bele be surafi **bujume** urebufi jeterengge be buda sembi.
 凡 米 ヲ 淘。 炊キ タテ 喰フモノ ヲ。 飯 ト云フ。
 [buda 飯: 上 30a 石寄親之]

(34)の「boo」は同じ語積中に二度出てくる。一方には『清文鑑』の漢語訳「房」に「イエ」とルビを振り、もう一方は「家」と訳してある。同様に、「bujumbi」も(35a)のように『清文鑑』の漢語訳「煮」に「タキ」とルビを振ったものがある一方で、同じ帳で横並びになっている(35b)では「炊キ」と訳されている。このような語句が漢語訳のままにするか、日本語に訳すかの分かれ目だったのかもしれない。一方で、訳編者によっては漢語訳をそのまま用いず、できる限り日本語にしようとした者もある。

(36) **beye** **holfiyakan** bime golmin, jalan jalan i **banijhabi**, uju sahañun, juwe salu,
 身 稍ヒラタク シテ 長ク。 節 節 アリテ生レリ。 頭 黒ク ニツノ 鬚アリ。
 bethe labdu unchen **fasilangga**, amba ajige adali akū, niyalma be šešsembi.
 脚 多ク 尾ニ マタサシタル物ナリ。 大 小 同シ カラス。 人 ヲ サス也。
 [šešeri umiyaha 蜈蚣: 上 40b 游龍俊之]

(37) (前略) jai buya juse sektu **garsa gosibume** banjihangge be,
 又 小 児ノ 才發ニシテ。 スミヤカニカワイラシク。 生タルモノヲ。
 kendumbihete[sic.hendumbihede] jilakan sembi.
 云フトキニ。 可憐 ト云。 [jilakan 可憐: 下 21a 彭城雅美]

冒頭に挙げた(3)なども訳文に漢語がほとんど用いられていない例と言える。

(38)[=(3)] golmin juwan da funcembi, yasa ajigen, dulimba be bukdamе hadahan de
 長サ 十 ヒロニ 余リ。 目 ホソク。 ナカ ヲ クミテ カギ ニ
 hūwaitafi juwa ergi be gala arame dedubume sindafi, ajige sujahan sujafi dubede
 クリ。 両 方 ニ 手ヲ ツケテ フセ オキ。 小キ サへ木ニテ サへ。 サキニ
 golmin selei sirge hūwaitambi, cecige[sic.cecike] doha manggi, selei sirge be
 長キ ハリ カ子ヲ クリ。 小鳥 オリシ 時。 ハリ カ子 ヲ
 (ta)tame
 ヒキ。

2.3.3. 日本語にならないものは説明

ルビにはその漢語（訳）に対応する日本語訳をふしているほかに、以下のようにその語句の説明文を加えたものもある。これらは当該の漢語に相当する日本語がないと判断し、かつ漢語訳のままでは理解しにくいと判断したものであろう。

(39) turi i tuwali[sic.duwali] turi ci majike[sic.majige] ajigen, fulgiyan šanyan juwe
 豆 ノ 類 豆 ヨリ 略 小シ。 紅 白 ニ
 hacin bi, lala teliyere, efen i do sindara, dubise efen de latubure, ufafi
 種 有リ。 飯ニ ^{タキ} 糞 蒸菓子ノ 餡ニ 入レ。 ^{小豆ヲツケタル菓子} 豆粟産糕 ニ ^{ツケル} 貼也。 粉ニヒキ
 dere gala oboro jergi bade baitalambi.
 顔 手ヲ 洗フ 様ノ 事ニ 用ユルナリ。 [sisа 小豆: 上 36b 游龍俊之]

(40) g'an i abdaha be cargi[sic.carki] untehen[sic.undehe] ci ajige tūfi, juwan
^{ヤツメノ} 鋼 ノベイタ ヲ ^{薬師石} 檜 板 ヨリ 小ク 打チ立。 十
 ninkun[sic.ninggun] farsi be, tehe de juwe jergi lakiyafi forirengge be, geren
 六 ^{マイ} 塊 ヲ ^{カケギ} 架子 ニ ニ ダン ツリ 撃ツモノ ヲ。 方
 kanggiri sembi.
 響ト 云フ。 [geren kanggiri 方響: 下 29b 鉅鹿篤義]

(39)、(40)のほかにも「ekcin i duwali ^{怪物} 醜鬼ニ ^{ニヨリシモノ也} 類²¹」「itulhen ^{ウサギヤキルタカ} 兔鶻²²」「alin i ebcі 山ノ筋²³」といった例も見られる。また、このような説明文をルビではなく本文中に記した者もある。

(41) moo be sejen i bulun i adali majige golmikan arafi (後略)
 木 ヲ 車 ノ 輪ヲハムル木ノ如ク ^{ホマ} 轆 長口 作り。
 [tatakū -i šürgeku 轆轤: 上 43b 彭城種美]

(42) turi iyehu[sic.miyehu] bakjira[sic.bakjara] onggolo oromu i adali gaiha
 豆 腐ノ ^{ヨル} 凝 前ニ。 獸乳ヲ糞テ浮タル皮ノ如キモノヲ取テ。

²¹ 「jolo 醜鬼」(下 22b: 彭城雅美)

²² 「yasatabumbi 熬鷹」(下 24a: 彭城雅美)

²³ 「hejihe 山肋險處」(下 30b: 鉅鹿篤義)

afahanahangge be, miyehusu sembi.

一枚ヅツニナシタルモノヲ。豆腐皮 ト云。

[miyehusu 豆腐皮: 下 12b 穎川道香]

2.3.4. 長崎方言

訳文の中には、長崎方言と思しき例も散見される。これらの例は改めて唐通事らが長崎出身者であることを示すものである。

(43) yasai buleku i adali, ser seme jaka be tuwara de **amba** ome saburengge be,
眼鏡 ニ 同シ。細カニ アル モノ ヲ ミル ニ。 **大ク** ナリテ ミエルモノ ヲ。

badarambungga buleku sembi.

顕微鏡ト 云。

[badarambungga buleku 顕微鏡: 上 25b 彭城廣林]

(44) miyoocan sirdan wehe gida i jergi agūra de goifi **dahakū** nioruke guruke
鐵炮。 矢。 石。 鎗。 等ノ 物具 ニ 中リ **ホゲズシテ**。 青傷 **紅腫**

babe, luhuluabuhebi[sic.luhulebuhebi] sembi.

所ヲ。 浮傷 ト云。

[luhulebuhebi 浮傷: 下 9a 穎川道香]

(45) uju **kapahūn** angga amba, uncehen i erki[sic.ergi] sibsihūn (esihe) akū amba
頭 **場** 口 大ク。 尾 ノ 邊 **窄**。 鱗 無口 大キ

ningge da funcembi, fusihūn nimaha.

者ハ 尋ニ 餘ル。 賤 魚也。

[laha 准子: 下 4b 穎川春重]

この他にも、「angga 口」のルビに「サマ」とあるのや「haga 魚刺」のルビに「イケ」とあるのも長崎方言の現れと見てよかろう²⁴。また、方言かどうか判断が難しいが、以下のような例もある。

(46) (前略) fere butu dobi i yeru be **gidame** tulefi encu ba be sangga arafi,
底 暗 狐 ノ 穴 ニ **カムセテ** シカケ。別ノ 所 ヲ 窟窿 アケ

šanggiyan fangšame tucire dobi be tebume butarangge be, (d)obi yasha sembi.

烟ヲ 燻テ。 出ル 狐 ヲ イレテ トルモノ ヲ。 打狐狸の套子ト 云。

[dobi yasha 打狐狸の套子: 上 50a 彭城種美]

(47) temen hūhun **yabure** be, lesumbi sembi.

駝 快 **走** ヲ。 駝疾走 ト云。

[lesumbi 駝疾走: 下 6a 穎川春重]

(48) yaya suje i jergi jaka be tuku doko kancime, kubun sekteme ulhun sindame
凡 絹 ノ 類ノ 物 ヲ。 表 裏ヲ 合セテ。 綿花ヲ イレテ。 領子ヲ ツケ

arafi bayede[sic.beyede] **(da)sirengge** be, jibehun sembi

拵エ。 身ニ²⁵ **蓋モノ** ヲ。 被 ト云。 [jibehun 被: 下 21a 彭城雅美]

2.3.5. 個人差

本章の最後に、訳文中に見られる訳編者間の差について指摘する。同じ語句を訳す場合であっても、当然のことながら訳編者間で訳文が異なることはありうる。以下に挙げる例は誤訳というほどではないが、もし誤訳が含まれる場合、

²⁴ 下 26a 及び下 32a。共に鉅鹿篤義による。

²⁵ 波線部は誤訳ではないが、語釈の満洲語と訳文の日本語の位置対応がずれている。

唐通事間の満洲語能力の差を測れる事案である。まず、(49)は「efen」の訳語である。

(49a) (前略) jai efen tubihe be (dere) de jergi den sahame dasifi (後略)

又 餅々 果物 ヲ 臺ノ上 ニ □□□リ ニ モリテ オホヒヲキセ。

[dere 桌: 上 47a 彭城種美]

(49b) leke be dursuleme araha efen be leke sembi.

磨^{トイシ}刀石ニ 體^{カクドリ}テ。 作リシ ムシクワシ ヲ 扁條 ト云。

[leke 扁條: 下 6a 潁川春重]

(49c) efen arafi jembibe bele boco šahūn.

菓子 拵エ 喰フ也 粒ノ 色 淡白シ

[yeye šušu 黏高粱: 下 24a 彭城雅美]

(49a)は『清文鑑』の漢語訳のまま横にルビを振ったもの、(49b)はそのルビをそのまま訳文にしたもの、(49c)は「ムシ」の部分省略したものである。もう一例、(50)は「i adali」の訳語である。

(50a) undehen be duin bethe sindame, nahan i adali arahangge be, besergen sembi.

板 ニ。 四ツ 脚ヲ ハメテ。 ^{アサ、マノトコロ} 炕 ノ ヲフニ。 作リタルモノ ヲ。 牀 ト云。

[besergen 牀: 上 26b 彭城廣林]

(50b) šu ilhai da be muke suwaliyame hujurefi muke be sekiyefi funche fiyen i

蓮 根 ニ 水ヲ マゼ 摺オロシ。 水 ヲ シタメ。 剩タル 白粉 ノ

adali, da be šufin sembi, (後略)

如キ セン ヲ 藕粉 ト云フ。

[šufin 藕粉: 上 42b 游龍俊之]

(50c) bikan[sic.bigān] i soki[sic.sogi], abdaha akjaba i abdaha i adali bime ajige,

野 ノ 菜也。 葉ハ ^{ス、ミ、ラ} 蕒^{ス、ミ、ラ} ノ 葉 ニ 同ク シテ 小ク。

gincihyan nilukan, cikten suwanda i cikten i adali bime den, amtan maca i

光 澤アリ。 莖ハ ^{ニシク} 蒜^{ニシク} ノ 莖 ニ 同ク シテ 高ク。 味ハ ^ラ 小根菜 ニ

adali gidafi jembibe, eshun inu jembibe wa sain.

同シ。 灌^{ヒシ} 喰。 生ニテ 亦 喰。 氣味 ヲロシ。

[sejulen 野蒜苗: 上 35a 石寄親之]

(50a, b)は「i adali」を正しく訳していると見てよかろう。一方、(50c)は直訳に近い形で「adali」を「同じ(く)」と訳出している。この場合、文脈上「全く同じ」ではないのだから、厳密に言えば誤訳と言えなくもない。なお、巻一全体を見たとき、(50a, b)のように訳出しているのは少数で、大多数は(50c)のように訳出している。逐語訳の原則に依拠した者が多かったことを裏付けるものではないだろうか。意識については次章で触れる。

3. 意識

上原(1971:20)は以下の(51)を誤訳の例として挙げている。「hefeli」の意は「腹」なのであるから「肚^{ハラ}」のようにルビをつけるべきという指摘である。

- (51) giranggi be simhun hefeli i gese duin i durbejen ninggun dere obume arafi
 骨 ヲ 指 肚 ノ 程ニ 四 擲 六 面ニ シテ 拵へ。
 ninggun dere de emu ci ninggu de isibume tongki fetefi moro fengseku de
 六 面 ニ 一 ヨリ 六 ニ 至ルマテ 星ヲ 創。 碗 小盆子 ニ
 maktame efirengge be sasuku[sic.sesuku] sembi.
 抛テ ナクサム者 ヲ。 骰子 ト云フ。 [sesuku 骰子: 上33a 石寄親之]

果たして上原の指摘は語の意味が正確にとらえられていないという点においては正しい。しかし筆者は(51)を誤訳と認めるべきではないと考える。ここまで見てきたように唐通事たちは主に『清文鑑』の漢語訳をもとに満洲語を解し、ルビを振るなどしながら、より自然な日本語訳にしようと努めている。とすると、上の訳も当然「hefeli」の意が「腹」だと理解していたという前提に立つべきであろう。「肚」に「サキ」というルビをふしたのはなぜか？ (51)は「サイコロ」の語釈である。サイコロの大きさを示す際に、骨を指先ほどの大きさに六面を四角に揃えるという説明は、より自然な日本語にしようと努めた結果であろう。直訳して「指(ノ)肚のように」とするよりは断然上の説明のほうがわかりやすいと思われる。このように唐通事の中には逐語訳の原則に立ちながらも、適宜自然な日本語になるように意識している者もいる。本章ではそのような意訳がどのような形で行われたか、一例を挙げる。

3.1. 語句に関するもの

- (52) esihe akū, angga ajige beye galai falanggū gese ga(l)fiy(an) banjihabi, emu to
 鱗 無シ。 口 小ク。 身ハ 手 掌ノ □□ 扁ク 生セリ。 半 尺
 isime bi, sukū umesi idun, niru sibedere de baitalambi.
 計リ 有リ。 皮 至テ 粗シ。 箭竹ヲ □ク ニ 用ユル也。
 [dulan nimaha 砂魚: 下4a 颯川春重]

(52)の「emu to」であるが、「to」は「親指と人差し指を広げたほどの長さ」を意味する。この「to」は2.3.3 で見たように説明文にしてもよかったはずであるが、(52)では「一to」が日本でいうところの「半尺」に相当すると判断し意識したものと思われる。この判断は正しかろう。

- (53a) geren yamun i ambasa hafasai yalure ulha be tuwakiyara niyalma be, morici
 諸 役所 大臣 官人ノ 騎ル 馬 ヲ 見守ル 人 ヲ。 小馬
 sembi.
 ト云。 [morici 小馬: 下13a 颯川道香]
- (53b) moo i jergi jaka be geyeme argan tucibume arafi morin ulha šorengge
 木 ナトノ 物 ヲ 削リ。 齒ヲ タテハ コシラエ。 馬 ナトヲ 刮モノ
 be šokū sembi, selei arahangge inu bi.
 ヲ 匏子 ト云。 鐵ニテ 作リタルモノ モ 有リ。 [šokū 匏子: 上41a 游龍俊之]

(53)は「ulha」の例である。「ulha」は畜類一般を指す語と考えられるので、(53a)のように「馬」の意味にはならない。だが、これも単に誤訳と下すのは籠絡的である。(53a)は「morici 小馬」の語釈であり、「ambasa hafasa」が「yalumbi」する動物だから「馬」でよいだろうと判断し意識したものと考えられる。

「ulha」を意識したものとして(53b)も挙げられる。「morin ulha」を「馬(をはじめとする)畜類」だと理解したうえで、「ナト(など)」と訳出したものと思われる。なお、本文中で(53b)の直前に掲載されている語句にも同様に「ナト」と訳出した「ulha」の例が見られるので、これは故意に訳したものと見てよかろう。

類例は以下の(54)である。(54)の「muwa」や二つ目の「amba」は前後の文脈から勘案して意識したものと考えられる。

(54) erei moo umesi den **amba**, ududu tebeliyen **muwa** bime to(n)do tubihe soro i
 此 木 イタツテ 高 **大ナリ**。 幾ク ^{マバン}抱 **ホド** 有テ ^{スダ}直ナリ。 實ハ。 棗 ノ
 gese **amba**. juwe ujan šulihun, eshun niyanggūci amtan jušuhun bime fekcuhun
 如キ **ホドニシテ**。 両 端シ ^{トコロ}尖。 ナマヲ 嚼メハ。 味ヒ。 酸 シテ ^{シフ}渋シ
 baji ome bolgo wangga ombi.
 シバラクシテ。 清ク 香バシク ナルナリ。 [fika 橄欖: 下 38a 彭城昌宣]

(55)は一見「ele」を訳出していないように見える。だが、これも直後に「gemu」という語が来ていることから鑑みて故意に訳出しなかったと見るべきであろう。その証拠に「物」という訳語が本文中において「ele」と「jaka」の中間あたりに書かれている。

(55) yaya hacin i bele i uheri gebu, jai yaya jetere **ele jaka** be, gemu jeku
 凡 種々 ノ 米 ノ 總 名。 又 凡 喰ル **物** ヲ。 皆 穀
 sembi.
 ト云。 [jeku 穀: 下 20a 彭城雅美]

このような語句に関する意識の例は他にもあるが、紙面の関係上この程度に留める。

3.2. 文法に関するもの

(56) yaya bithe hūlara erdemu tacire boo be, tacikū sembi.
 凡 書ヲ 讀ミ 徳ヲ 學ブ ^イ房 ヲ。 學ト 云。 [tacikū 學: 上 44a 彭城種美]

(56)の下線部は連体形になっているが、訳文は連用形になっている。だが、これは誤訳ではなく、「bithe hūla-」と「erdemu taci-」がともに「boo」を修飾する

という文の構造を理解したうえで意識と考えられる。このような訳し方をしている者は、鄭永寧²⁶、彭城廣林²⁷、石寄親之²⁸、游龍俊之²⁹他、数多い。次に助詞に関する一例を挙げる。

- (57)[=(11)] *menggun teišun toholon i jergi jaka be cikin jerin tucibume muheliyen*
 銀 真鍮 錫 等ノ 物 ヲ。フチ キワ タテ、 丸ク
obume tūfi muke tebufi dere oborongge be, obokū sembi.
 ナルヤウニ打立。水ヲ イレ 顔ヲ 洗フモノ ヲ 洗臉盆ト云フ。

[obokū 洗臉盆: 上 12b 鄭永寧]

上の(7)に挙げた凡例の「原ヨリ助語テニヲハ有テ備サニ文意ヲ述ト雖トモ事情聯貫ノ宣ニ從ヒ 或其詞質ヲ失ハン事ヲ患ヒテ 用ル所ノテニヲハ画一セサルヘシ」という箇所は(57)のような例のことを指していると考えられる。類例は(58)～(60)である。

- (58) *maise ufa be nimenggi suwaliyame suifi, hacingga do sindame tuhe efen i*
 麥ノ 粉 ニ 油ヲ マセテ コ子。色ハナル 餡ヲ イレテ 餅 ノ
adali arafi haksabuhange be, biyangga efen sembi.
 ヲフニ コシラヘ。焼タルモノ ヲ。月 餅 ト云。[biyangga efen 月餅: 上 27b 彭城廣林]

- (59) *boo i niongniyaha de adali, beye amba funggala der sema[sic.seme] šanyan*
 家ニオル 鷺 ニ 同シ。體 大ク 尾翎 甚ダ 白シ。

[garu 天鷺: 上 21a 神代定光]

- (60) *tuwara hūlara de ja obume* *šošome tonggime araha bithe be tuwabun sembi.*
 看 讀 シ 易 ヤウニ。約 擧ケテ 作タル 書 ヲ。覽 ト云。

[tuwabun 覽: 下 2a 穎川春重]

(58)の「*maise ufa be nimenggi suwaliyame suifi*」を直訳すると「麦粉を油に(と)混ぜ合わせこねて」となるだろうが、これをより自然な日本語にしようと意識したものと考えられる。(59)も「*boo i niongniyaha*」も直訳は「家の鷺」となるが、これより(59)の訳文のほうが自然である。(60)の「*tuwara hūlara de ja obume*」も直訳すると「見るとき、読むときに容易くなるように」となるが、(60)のほうが自然な日本語だと言えよう。なおあえて助詞を無視し動詞の一部であるかのよりに意識した(60)のような例は巻一ではこの例だけである。

3.3. その他

上原(1971:19)は唐通事が満洲語を十分に理解できていなかった例として以下の(61)を挙げている。

²⁶ 「ebubure camhari 下馬牌」(上 11a)

²⁷ 「biya aliha fiyenten 當月司」(上 27b)

²⁸ 「sejen 車」(上 34a)

²⁹ 「suje 緞」(上 38b)

- (61) yaya siten[sic.siden] i baita be tuttu obu uttu obu seme fulgiyan fi i arara
 凡 公儀 ノ 事 フ。 左様。 ケ様 ト。 朱 筆ニテ 寫
 be pilembi sembi.
 フ。 批判 ト云フ。 [pilembi 批判: 上 31b 石寄親之]

上原は「tuttu」と「uttu」の語順が日本語訳で逆になっていると指摘する。すなわち、「左様ケ様」なら「uttu tuttu seme」であると述べる。だが、この点は誤訳とは言えまい。日本語は「左様ケ様」が、満洲語は「tuttu uttu」が自然なだけである。それを直訳せずに意訳した点はむしろ評価すべきであろう。上の(7)に挙げた凡例の「和語ニ月日漢語ニハ日月ト云フ如キ 清文ニモ雄雌横縦ト□□類ヒ尤多シ 皆本朝ノ句調ニ仿フ」とあるのは(61)のような例を指していると考えられる。ただ、上原が指摘するように「obu」が訳文から欠けている点はまだ少し工夫の仕様があっただろうと筆者も思う。類例は(62)にも見られる。

- (62) ehe sain be bodorakū labsime jetere niyalma be, lobi sembi, (後略)
ヨシ アシ フ カモワズ。多分ニシテ 飲食スル 人 フ。甚饒 ト云。
 [lobi 甚饒: 下 7b 颯川春重]

(63)は満洲語で二文になっているところを日本語訳では一文にまとめている例である。

- (63) uthai gurun i baita, ejen de oci dasan sembi, amban de oci baita sembi.
 即チ 國 ノ 事。 君 ニ セバ 政ト 云イ。 臣 ニ セバ 事ト 云。
 [dasan 政: 上 44a 彭城種美]

これも誤訳だとは言にくい。後ろの「sembi」を「云」としていることから考えても、語釈末の「sembi」は出現頻度も高く皆誤訳していないことから考えても、(63)の下線部「-mbi」を接続形と理解していたとは到底思えない。「gurun i baita」が両方の文にかかっていることを表そうとするが故の意図的な意識だと考える。(63)の類例は鄭永寧³⁰、彭城種美³¹、蘆塚恒徳³²などにも見られる他、上述の(13a)もこれに該当する用例である。

一方で、巻一においては(64)の一例のみであるが、筆者であれば一文で訳すだろう箇所を二文に分けて訳出している者もある。

- (64) uju engge meifen huru sahaliyan bime, funggaha suhun boco, guwendere jilgan
 頭 嘴 クヒ 背 黒ク シテ。 身ノ毛 米 色 鳴ク 聲

³⁰ 「edungge šungkeri ilha 風蘭」(上 11a)

³¹ 「dasu maktambi 用整樹撞箭」(上 44b)

³² 「fafaha 紅櫻」(下 36b)

mi to seme hūlara adali, ofi šajingga kasha[sic.gasha] sembi.
 弥 陀 ト 呼ニ 同シ。因テ 佛 鳥 ト云フ。

[šajingga gasha 佛鳥: 上 39b 游龍俊之]

4. 結語

本稿では『翻訳満語纂編』巻一を対象に、満洲語語釈に対して唐通事たちがどのようにして日本語訳をふしていったのかを見てきた。訳编者によって個人差はあるが、その原則は以下のようにまとめることができる。

(65) a. 逐語訳を原則とする。

- b. まずは『清文鑑』の漢語訳をそのまま利用する。ただしその漢語のままでは日本語として解しにくい場合、ルビをふす。
- c. その意を十分に解している者は漢語訳をそのまま用いず日本語で翻訳する。その際、方言を使っている者もある。
- d. できるかぎり日本語として自然な文になるように意識することもある。

反面、満洲語の語釈に対する日本語訳に関する考察は、冒頭にも述べた通り、今後の課題が多く残されている。また本稿では紙面の関係上、誤訳については論ずることができなかつた。この点も別稿に譲りたい。

最後に、上原(1971)は上述の(13a)のような例を根拠に、唐通事らが『清文彙書』を参照していた可能性について言及している。この点に関して、本稿では別の角度からその可能性がありうることを指摘しておく。例えば、以下の(66)に現れる「fehure tangkan」という語句であるが、その意を唐通事は理解していたように見受けられる。

(66) taktu deyen i jergi den boo arara sahara de šartan moo i hūwaitaha fehure
 楼 殿 等ノ 高キ 家ヲ 造リ ^{キツク} ■³³ ニ □ 木 ニテ 控 ^{トリツケタル} ヲ
tangkan be, tehe wan sembi.
ダン ヲ。脚 手ト 云。 [tehe wan 脚手: 上 46b 彭城種美]

このうち、「fehumbi」は『清文鑑』に求められる語であるのに対して、「tangkan」は『清文鑑』に求めることができない。なのになぜ彭城種美はこの語の意を理解できたのか。満洲語に堪能な教師的存在がいて口頭でその意味を教えてくれたのかもしれないが、仮にそうでなかった場合、この「tangkan」は例えば『清文彙書』に載っているもので、唐通事らが『清文彙書』を参照した可能性は皆無とは言えまい。

33 ■は「いしへん」に「土+力」

また、『翻訳満語纂編』巻一に関しては、以下の一例のみであるが、『清文鑑』の語釈と異なる語釈をつけた語句がある。

(67) cikten niowanggiyan (a)b(d)aha amba bim(e) muheliyeken notho be alifi futa,
クキ ミトリ ホロシ
 莖 緑色 葉 大ク シテ 畧圓。 皮 ヲ 剥 繩

(a)ra(m)bi.

□□

[kima 纈麻: 下32b 鉅鹿篤義]

『清文鑑』における「kima 纈麻」の語釈は「hiyalahūwa ci ileme gaiha notho be kima sembi. hūnta ci majige hūsun akū³⁴」となっており、(67)とは全く異なる。版本によって『清文鑑』の内容が異なっていたのか、今後確認が必要であるのに加え、この事実は唐通事たちが『清文鑑』以外の書物を参照した可能性をも示唆するものである。

³⁴ 卷 23. 布帛部. 絨棉類-14

参考文献

- 赤峯裕子 (1989) 「〈翻刻〉『翻譯滿語纂編』抄 その一」『文獻探求』24: 57-75.
- 赤峯裕子 (1990) 「〈翻刻〉『翻譯滿語纂編』抄 その二」『文獻探求』26: 55-71.
- 赤峯裕子 (1991) 「〈翻刻〉『翻譯滿語纂編』抄 その三」『文獻探求』28: 72-89.
- 上原久 (1971) 「長崎通事の満州語学」『言語学論叢』11: 13-24.
- 河内良弘・清瀬義三郎則府 (2002) 『満洲語文語入門』、京都: 京都大学学術出版会
- 篠崎久躬 (1997) 『長崎方言の歴史的研究－江戸時代の長崎語－』、長崎: 長崎文献社
- 竹越孝 (2016) 『満漢字清文啓蒙〔会話篇・文法篇〕－校本と索引－』、東京: 好文出版
- 津曲敏郎 (2002) 『満洲語入門 20 講』、東京: 大学書林
- 羽田亨 (編) (1937) 『満和辞典』東京: 国書刊行会
- 平山輝男 (編) (1998) 『長崎県のことば』(日本のことばシリーズ 42)、東京: 明治書院
- 松岡雄太 (2013a) 「『翻訳満語纂編』と『清文鑑和解』の編纂過程」『長崎外大論叢』17: 61-80.
- 松岡雄太 (2013b) 「『翻訳満語纂編』の満洲語かな表記について」『満族史研究』12: 27-52.
- 松岡雄太 (2013c) 「『翻訳満語纂編』の語彙選抜基準」In: Kim Juwon and Ko Dongho (eds.) *Current Trends in Altaic Linguistics (A Festschrift for Professor Emeritus Seong Baeg-in on his 80th Birthday)*, 159-202. Seoul: Altaic Society of Korea.
- 松岡雄太 (2015) 「『翻訳満語纂編』の見出し満洲語について」『九州大学言語学論集』35: 329-345.

**Some Principles of Translation from Manchu to Japanese
in *Honyaku Mango Sanhen***

MATSUOKA, Yuta

During the mid-nineteenth century, Chinese translators in Nagasaki edited the Manchu-Japanese dictionary, *Honyaku Mango Sanhen* (翻譯滿語纂編). This dictionary presents each Manchu head word with a Chinese translation and a definition rendered in, both, Manchu and Japanese.

This paper discusses the three translation methods employed by the translators. First, they generated a direct translation of the definition from Manchu to Japanese. Second, Chinese translations in *Yuzhi Zengding Qing Wejian* (御製增訂清文鑑), a copytext of *Honyaku Mango Sanhen*, were referenced to ensure the accuracy of the Japanese translations. Finally, the translators appended Japanese explanations of obscure Chinese characters and concepts, occasionally offering more liberal translations.